

P1-041

大学病院における虐待予防の視点での妊婦支援

小川 知子¹、岩崎 美和²、張田 豊³、松井 彦郎³、
下田 木の実³、堀江 良平⁴、永松 健⁵、
多田 真理子⁶、山田 典子²、岡 明³

¹東京大学医学部附属病院 こころの発達診療部
²東京大学医学部附属病院 看護部
³東京大学医学部附属病院 小児科
⁴東京大学医学部附属病院 救急科
⁵東京大学医学部附属病院 女性診療科・産科
⁶東京大学医学部附属病院 精神神経科

【目的】

東京大学医学部附属病院は、平成22年7月に虐待対策委員会を設置した。26年度には呼称を「ファミリーサポートチーム」とし、虐待疑いケースだけでなく虐待予防の視点で幅広い支援を行う方針とした。当院が、様々な疾患を合併する妊婦の出産を受け入れていることも影響し、同時期から支援が必要な妊婦(妊婦ケース)の相談が増えている。本研究では、委員会が対応した妊婦ケースの傾向と今後の支援の課題を明らかにする。

【方法】

平成22年7月～29年3月までの委員会の相談対応リストから妊婦ケースの相談を抽出し、本リスト及び診療録から後方視的に検討した。

【結果】

調査期間の総相談件数517件のうち、妊婦ケースは135件(26.1%)で、妊婦の年齢の中央値は34歳(14～47歳)であった。相談内容は、妊婦の精神的問題72件(53.3%)、身体的問題10件(7.4%)、養育環境問題45件(33.3%)、養育意志の問題5件(3.7%)がある中、妊娠・出産・養育をどう支援していくかというものであった。妊婦ケースの相談件数の推移は、平成22～24年度は0件で、25年度3件、26年度5件であった。「ファミリーサポートチーム」という呼称を用いるようになった翌27年度以降は増加し、年間40～44件となっていた。

29年度では委員会への全相談件数155件のうち、妊婦ケースが27%(43件)と最も多く、妊婦ケースでは身体又は精神疾患の診断を受けている妊婦が68%(29件)を占めていた。

委員会は妊婦ケースの相談に対して、妊婦と家族が快く支援を受け入れて新しい生活をスタートできるよう配慮している。そのために、妊婦と家族、産科や小児科、精神科などの各診療科および地域関係機関とともに、出産や養育の課題を整理し、必要な医療を受けながら妊婦と家族が望む養育環境を整えられるよう支援を行っている。

【考察】

妊婦に関する相談の増加は、虐待対策委員会が子育て支援を行う組織であることが院内外に認識され、産科や小児科、精神科を含む各診療科、そして地域関連機関との連携が行えるようになった結果である。妊婦の抱える問題は複雑であり、連携をさらに深めていくとともに、個別ケースへの対応をより丁寧に行っていく必要がある。

P1-042

NICU退院後の児童虐待の要因分析－入院中の児童虐待アセスメント・ツール項目と個人特性－

龜山 千里^{1,2}、岡山 久代³

¹筑波大学大学院人間総合科学研究科看護科学専攻
²総合病院土浦協同病院
³筑波大学医学医療系

【背景】

NICUから退院した児の児童虐待リスクが高いことから、NICUにおける児童虐待予防への介入支援の必要性が高まっている。しかし新生児専門学会等での児童虐待に関するガイドラインは存在せず、児童虐待予防、介入支援は各NICUごとに取り組んでいる現状がある。A病院では、2013年から独自で作成した児童虐待アセスメント・ツール(以下ACAP)を用いて、要支援家庭の抽出を行っている。そこで本研究では実際の虐待症例を用いて入院中の児童虐待アセスメント・ツール項目と個人特性との関係を明らかにすることを目的とした。

【方法】

対象は関東圏内でNICUを有するA病院総合周産期母子医療センター1施設にて、2013年1月～2016年12月に退院した児とした。母親不明の児1人を除外した748人のデータについて診療録をもとに後方視的に分析した。本研究における退院後虐待症例とは1)養育上の困難があり退院後乳児院へ入所措置となった児2)要保護児童対策地域協議会の支援対象児3)里子とされた児とした。退院後虐待症例は小児科外来及び市町村保健センターからの連絡記録より抽出し従属変数とした。一方独立変数はACAPの52項目(母親44項目、乳児8項目)と母児の個人特性5項目とした。分析方法はまず対応のない単変量解析を用いた群間比較を行い、その後有意差が認められた項目を用いてロジスティック回帰分析(強制投入法)を行った。分析にはIBBM SPSS ver24を用いた。本研究は当該施設の倫理委員会の承認を得て実施した。

【結果】

母親の平均年齢は31.4歳(SD5.7, 16-45)、NICU入院時の婚姻状態は既婚が701人(93.7%)であった。児の性別は男女それぞれ374人(50.0%)であり、出生体重は平均出生体重2158.4g(SD787.3, 386-4272)であった。児童虐待群は11人(1.4%)であった。ロジスティック回帰分析の結果、多産または間隔の詰まった妊娠(OR37.90, CI5.19-276.81, p=0.000)、問題解決ができない(OR20.95, CI1.08-407.67, p=0.045)、男児(OR9.28, 95%CI1.19-72.84, p=0.034)が抽出された。

【考察および結論】

ACAPの項目のうち多産または間隔の詰まった妊娠、問題解決できないが虐待と関係していた。これはドメスティック・バイオレンス被害者の特徴と関連していることから潜在化している可能性が考えられた。一方男児が虐待と関係していた。児童虐待の一般的なりリスク要因とは逸脱しているため、NICU退院児特有の原因を検索していく必要がある。